

## 論文の和文要旨

論文題目：近世朝鮮語の過去を表す接辞について

氏名：高橋春人

本研究では、近世朝鮮語で動詞の過去を表す接辞の用法を考察し、それらが互いにどのような使い分けられていたのかを論じる。近世朝鮮語においては、過去を表す新しい形式が使用されるようになったが、それ以前に用いられていた形式も、新たな形式の登場によってすぐに用いられなくなったわけではない。そのため、それらの用例を収集し、互いに比較して、用法を考察する必要がある。

本研究で調査するのは、近世朝鮮語の中でも英祖および正祖の時代、つまり18世紀中頃から末にかけての刊本資料と筆写資料である。それらの文献の中から一定の条件を定めて利用するものを選定する。

研究対象とする主な形式は、接辞なしの形(または‘ $\emptyset$ ’の形)と接辞‘ $\text{-}\text{ㄷ}\text{-}(\text{-te})$ ’および‘ $\text{-}\text{앗}\text{-}(\text{-as})$ ’である。動詞の場合に過去を表す‘ $\emptyset$ ’と‘ $\text{-}\text{ㄷ}\text{-}(\text{-te})$ ’は、近世朝鮮語の前の中期朝鮮語においては、アスペクトの点で対立していたものと考えられるが、‘ $\emptyset$ ’は現代語の平叙文終止形ではほぼ使用されなくなり、‘ $\text{-}\text{ㄷ}\text{-}(\text{-te})$ ’は直接証拠性・意外性を表すようになったことが知られている。接辞‘ $\text{-}\text{앗}\text{-}(\text{-as})$ ’は、中期朝鮮語で語尾‘ $\text{-}\text{아}\text{-}(\text{-a})$ ’と存在を表す用言‘ $\text{잇}\text{-}(\text{is})$ ’からなる分析的な形式‘ $\text{-}\text{아}\text{ 잇}\text{-}(\text{-a is})$ ’に由来するものである。‘ $\text{-}\text{아}\text{ 잇}\text{-}(\text{-a is})$ ’は完了、結果、持続などを表していたが、現代語に至るまでに過去を表す接辞へと変化したことが知られている。したがって、近世朝鮮語の時期における‘ $\emptyset$ ’、‘ $\text{-}\text{ㄷ}\text{-}(\text{-te})$ ’、‘ $\text{-}\text{앗}\text{-}(\text{-as})$ ’などについて、

- ①古いテンス・アスペクト体系と新しいテンス・アスペクト体系のどちらが使用されるか。
- ②各形式が混在しているように見える場合、使い分けがあるか、あるとすればどのように使い分けられているか。
- ③‘ $\text{-}\text{ㄷ}\text{-}(\text{-te})$ ’の意味の変化は生じているか。

といった点が問題となる。

これらの問題点について考察するために、主に‘-았(-as-)’と‘-Ø-’の出現に基づき、次の三つの分布を整理し、それぞれの分布ごとに諸形式の用法を比較する。

分布1: ‘-았(-as-)’が使用され、‘-Ø-’が(ほぼ)使用されない→会話文の平叙終止形。

分布2: ‘-았(-as-)’が使用されず、‘-Ø-’が使用される→非会話文の平叙終止形。

分布3: ‘-았(-as-)’と‘-Ø-’の両者が使用される→疑問文の終止形、間接話法の平叙終止形、接続形‘-니(-ni)’、連体形。

さらに、これらの接辞が用いられる動詞句についても、アスペク的な観点から、反復的な場合とそうでない場合に分け、さらに反復的でないものを動的なものと静的なものに分けて考える。

分布1、つまり会話文の平叙終止形の‘-았(-as-)’と‘-더(-te-)’は、引用や発言を表す言語活動動詞に使われる場合、‘-았(-as-)’が一人称主語と、‘-더(-te-)’が三人称主語と使用される。それ以外の動詞に使われる場合、主語が一人称であれば、‘-더(-te-)’は静的な動詞句、つまり思考、感情などを表す動詞句や反復・習慣を表す動詞句とのみ使用され、動的な動詞句には‘-았(-as-)’が使用される。このような特徴から、分布1において動的な動詞句と使用される場合、‘-더(-te-)’は証拠性を表すものへと変化しつつあったと考えられる。この変化には用言句の状態性が関わっており、‘-더(-te-)’の変化は状態性の弱い、動的な動詞句との共起において先に生じたものと考えられる。このことから、未完了相の‘-더(-te-)’が一人称主語以外の動的な動詞句と共起した場合に目撃や観察をしばしば含意したため、直接証拠の意味が生じたものと推測される。

分布2、つまり非会話文の平叙終止形においては、三人称主語の場合における‘-더(-te-)’と‘-Ø-’の使い分けが問題となる。同じ動詞語彙が使用された‘-더(-te-)’と‘-Ø-’の例を比較すると、よりその場面に近づくという特徴を‘-더(-te-)’に見出すことができる。分布2の‘-더(-te-)’と‘-Ø-’はアスペクトの違いで説明でき、分布1で述べたような‘-더(-te-)’の変化は見られない。

分布3の中、接続形‘-니(-ni)’においては、「発見」を表す場合や、前件と後件が継起的な場合は、‘-았(-as-)’が使用されず、‘-Ø-’が使用されることが知られている。しかし、それだけではなく、継起的ではない一連の過去の出来事を述べたり、後続節で説明を加えたりするような場合にも‘-았(-as-)’が使用されないことが指摘できる。それらの場合を除き、‘-았(-as-)’が使用されるのは、結果・状態を表す場合や、後続節における命令、判断、主張などの根拠を示す場合である。結果・状態を表す用法だけでなく、理由や根拠を表す用法も、発話時もしくは後続節の時点への関わりや影響という点から分析できるので、‘-았(-as-)’はパーフェクトを表していると言える。さらに、言語活動動詞の用例の中、書物や石碑などに書かれた内容を引用する場合にも、結果の残存に対する意識のために‘-았(-as-)’が使用されている。

接続形‘-니(-ni)’において、‘-더(-te-)’には、主語の人称や動詞句の特性と関連した特徴は見

られず、‘-더(-te)’と‘-Ø’の関係は、中期語と同様に説明できる。ただし、‘-더니(-teni)’の用法は、後続節との関係から「同時」と「取り消し」に分けることができる。一部の用例では‘-더니(-teni)’と‘-앗더니(-asteni)’の違いが曖昧になる場合も見られる。

間接話法の平叙終止形も、分布3に分類される。そして、接続形‘-니(-ni)’の場合と同様に、‘-앗(-as)’は結果や影響を示すのに用いられ、パーフェクトを表す。ただし、語彙の意味によっては、‘-Ø’と‘-앗(-as)’の違いが曖昧になり得る。

接続形‘-니(-ni)’や、間接話法の平叙終止形では、中期語と同じ‘-Ø’と‘-더(-te)’の対立が維持され、‘-앗(-as)’はそれとは別にパーフェクトを表しているが、疑問文の場合は、状況が異なっている。すなわち、疑問文終止形の‘-Ø’と‘-앗(-as)’の違いは通常の疑問であるか、修辭疑問であるかという点に現れる。‘-Ø’は修辭疑問の比率が高く、‘-앗(-as)’は通常の疑問の比率が高いのだが、修辭疑問は時制の重要度が低いいため、引き続き‘-Ø’が使用できたものと考えられる。

疑問文終止形の‘-더(-te)’については、現代語とは異なり、二人称主語の疑問文にも使用されていることが注目される。二人称主語の疑問文の‘-더(-te)’は、分布1の場合と同様に、静的・反復的な動詞句と使用されることがあるが、それらを除くと、修辭疑問にのみ使用されているのが特徴である。先行研究が挙げている例文や、20世紀初頭の小説なども参照すると、静的・反復的な動詞句と使用される場合や、修辭疑問の場合は、20世紀初頭まで二人称主語の疑問文に‘-더(-te)’が使用できた可能性がある。

連体形に関しては、近世語において特徴的と思われる‘-앗(-as)’を含んだ形式を中心に述べる。また、語源的に連体形を含むいくつかの分析的な形式についても述べる。‘-ㄴ 즉(-n cuk)’は「仮定・条件」と「理由・根拠」を表し、‘-ㄴ 고로(-n kolo)’は、主に原因や理由を表す。これらにおいては、基本的には接続形‘-니(-ni)’と同様に‘-Ø’と‘-앗(-as)’が使い分けられているようだが、独自の特徴も見られる。

最後に、‘-아시리(-asili)’および‘-앗더(-aste)’を取り上げる。‘-아시리(-asili)’は、同じく過去と推測が関係する形式である‘-리러(-lile)’と比較できる。中期語において‘-리러(-lile)’の表していた「過去における推測」と「過去についての推測」の中で、近世語では、‘-아시리(-asili)’が「過去についての推測」を表し、‘-리러(-lile)’は「過去における推測」を表す。‘-아시리(-asili)’における‘-앗(-as)’は、結果状態やパーフェクトとの違いが曖昧になり得るものの、過去時制を表すと考えられる。

‘-앗더(-aste)’は、先行研究の見解とは異なり、「過去のある時点を基準とし、それ以前の出来事とその結果や影響」、つまり過去パーフェクトを表すものと考えられる。‘-앗(-as)’がパーフェクトを表し、‘-더(-te)’が過去を表すのである。‘-앗더(-aste)’は「断絶過去」を表す現代語の‘-았었(-assess)’と、過去や完了の形式を重複して使用するという点で共通しており、意味や用法においても類似点が見られる。

諸形式の用法をそれぞれの分布に沿って整理すると、分布1では新しい体系が使われ、それ以外の分布2や分布3などでは古い体系が使われていると言える。ただし、分布1の体系も、

‘-더(-te-)’が一人称主語と使用された場合の意味や、‘-더(-te-)’と‘-았(-as-)’の関係などを考えると、中期語・現代語とも異なる特色がある。また、分布3においては‘-았(-as-)’も使われているが、単なる新旧の体系の混在ではなく、‘-Ø’と‘-더(-te-)’の対立が維持されている中で、‘-았(-as-)’がパーフェクトを表している。‘-더(-te-)’に関しては、分布1で動的な動詞句と用いられる場合には、現代語のような直接証拠の意味を表す形式へと変化し始めていたが、それ以外の場合には、まだ変化が生じていなかったようである。